



総裁の種蒔き
FREEDOM

今日は世界平和監視機構
「コンパス」の総裁として
地球連合軍へやって来ました。

今もなお続いている
ブルーコスモスの残党が引き起こす争い。

そのような悲劇を止める為なら
私は私に出来る事をするつもりです。



「ラ○ス、やっぱり僕も一緒に…」

「心配はいりませんわ」

「キ○はこちらで待っていて下さい」

終わらない争い…それをキ○は
一人で解決しようと悩み苦しんでいる…
私はこれ以上キ○を苦しめたくないのです。

「さあク○イン総裁こちらへ
准将殿、話しは一時間程で
終わると思いますので…」

「はい、分かりました」

キ○の負担を減らす為にも
今度は私が頑張る番…
だから、分かって下さいキ○…

「では行ってきます」

「うん…」

あの、ラ○ス…

…何ですかキ○？

いや、何でもない
いってらっしゃい」

はい

行ってきます」



「堪りませんな……まさかク○イン総裁の方から
この様なお誘いが来るとは思っていませんでしたよ

「現在最も争いの火種となっている

ミ○ール大佐が率いるブルーコスモス残党の戦い……

その早期終結の為に
協力するというお話でしたよね？」

はい、その通りです……」



「もはやテロリストとなった奴らには
我々も困っているのです
ご安心下さい、約束は守りますよ」

「は、はい…」

ですから、その話はまた後で…
今は2人きりの時を楽しみましょう
『そ、そうですね…そうしましょう…』



「流石はかつてプラントのアイドルをしていたお人だ
その美貌は未だご健在のようですね
それにこの身体…素晴らしい、すっかり大人の女性だ」

「お気に召して頂けて良かったですわ…」

（いやらしい息遣い…そこから発せられる言葉…
この男の全てが不愉快極まりない…）

「そういうえば確かク○イン総裁は
お供の准将殿と同じ家で暮らしていると…」

「え、ええ…そうです」

「とても優しそうな彼氏ですな」

「はい、キ○は優しい…
優し過ぎるくらいです…」

「（そう、これはキ○の為でもあるのです…
この程度の事で音を上げる訳にはいきません）」

「あんな大人しそうな男ではこのような
キスはしてくれないのじゃないかな！」

「んっ!!」

「あっ……んっ……んふっ……!」

んっ

（何て乱暴なキス……!
強引に私の口の中に舌を入れてくる……っ!）

んっ

んっ

（キ○以外の男性と口づけをしてしまいました…
覚悟していた事とはいえず、やはり辛い…）

ズ
ッ
ッ

ですが、身体は許しても
心までは支配されるつもりはありません

私が愛する人はキ○だけ…）



（私がキ○を想う気持ちは本物です
今こうしているのも愛するキ○の為…

ズ
ッ
ッ

「コンパス」の総裁としての責務を果たし
そして、キ○を戦いから解放する為に
私の出来る事をしているまでです」



「んっ…ふう…っ」

「流石に男と暮らしているだけあって
勝手は知っているみたいですね」

（お口でキ○に何度か
した事はありますが…
この男のは…生臭い…）

しかし、まだ遠慮しているご様子だ
私に構わず、准将殿に
しているようになさって下さい」
んふっ…くう…んくっ…!」



「ク○イン総裁のフェラチオ…
まさかこの程度ではないのでしょうか？」

「ふっ…ん…むふっ………！」

さあ、見せて下さい
アナタの本気を…」



（始めてしまったからにはやり切るしかない…
ならば、ここは速やかに終わらせたいですわ…

やるしかありませんわ…っ！）

「んふっ……！」

「おお、これは良い感じだ
そのまま続けて下さい」

んふっ…ぶっ！
ぶふっ…んぷっ…んんっ！」

おお：これは酷い顔だ
ク○イン総裁の美しい顔が
私のチ○ポで台無しではないか」

（この様な姿は恥ずかしくてキ○にだって
見せた事がないというのに……）

「下品な顔ながらもその所作には
美しさが感じられますな
流石はラ○ス・クライン…」

過去はプラントのアイドル
現在はコンパスの総裁…
その様な人は
フェラチオさえも一流のようだ」

（いつかはキ○の為と思い
お口での行為も学んでいました…）

こうなれば、その知識…
ここで披露するまでですわ…!」



「んうむうっ…!!
ぶふっ!んぷっ!ぶっぷう!」

「うおっ…急に激しいフェラチオに!?
いやらしい音まで鳴らしてなんと下品で
スケベなひょっとこフェラなんだっ…!!」

（男性はこの様にエッチなのが良いと
いう事でしたが、本当みたいですわ…）

エッチなお口ご奉仕…続けますわ…!!）



「んんっ…んんっぷ！
んぷっ！んぷう…っ！」

「良いですぞ…ク○イン総裁…っ
その調子です…っ！」

（ああ、やはり恥ずかしい…っ
この様な事、今すぐやめたい…

キ○が相手ならいざ知らずこんな男のモノを
啜えて私はなんて下品な行為を必死に…

そう、これではまるで愛する人に
尽くしているみたいではありませんか…）



「くう…もう…そろそろ…で、出るっ
いきますよ…ク○イン総裁…っ！」

（出るのですね…
間もなく私の口の中にこの男の精液が…

初めての口内射精…

一体どの様な感じなのでしょう…？）

いくぞ…っ、で、出るっ…！」



「うぐっ！」
「んぷっ！」

（これが口内射精…っ
精液が口いっぱい広がって…
うう、限界です…受け止めきれない…！）



「ふう…想像以上に良いフェラチオでした
男の奉仕も心得ているとは
流石はク○イン総裁、恐れ入りました」

「うう…んふっ…」

（酷い匂いと味…キ○もこの様な…？
いえ、違います…）

んっ…♡

いっ…♡

例えば、匂いや味が同じだとしても
キ○のものでしたら私は喜んで受け入れますわ…

この男には不快感しかない…
私の身体全体が拒否反応を起こしている…

… ♪

「名残り惜しいですが、今日はこの辺りで…
次回が楽しみですね、ク○イン総裁…」

（今日はこれで終わり…
ですが、また次がある…）

さあ、外までお送り致しましょう」

外にはキ○が待っている…
ここでは話し合いがあっただけ…
そう…やましい事など何もなかった…）



「キ〇、お待たせしました」

「ラ〇ス、お疲れ様」



（身体が熱い…そんな…アソコが疼く…
この男との行為は心底嫌でした…
それなのにどうして私の身体は
こんなにも熱くなっているのでしょうか…）



（嫌であろうと男女のそういった行為を
すれば身体は自然とそうなる…
そうです、これは単なる生理現象
そう、ただそれだけの事…

ですが、私がこの様な状態になっているなど
キ○は当然、この男にも
決して知られてはいけない事ですわ…



「では、ク○イン総裁

本日はありがとうございます

「こちらこそ、ありがとうございます
それでは、また…」

次回のご連絡は早めにしますので…」

はい、お待ちしておりますわ…」



「それじゃあら○ス、行こうか

「ええ、キ○…」

大丈夫？何だか辛そうだけど

少し疲れただけです…

そう、それなら早く帰ってゆっくりしないかね
僕はミ○ニアムに戻らないといけないけど
ラ○スは家に帰って、僕送っていくから」

ありがとう、キ○…」



キ○とラの○スの邸宅

ワッ
ワッ

ワッ
ワッ

「んっ…

あ…あっ…♡」

（キ○、ごめんなさい…
ですが、あなたの為なのです…

キ○を戦いから解放する事…

その為に必要な…

私にしか出来ない事を

やっているのです…）



「うっ…んっ♡」

♡♡♡

♡♡♡

（あれからずっと
身体の火照りが収まらない…）

あんな男とキスをして

あの様な汚らしい…

男性器を口で咥えてしまったり…）



(そんな事をした後に私は
部屋に入るなり自慰に耽るなど…)

♡♡♡

♡♡♡

キ○は私を心配して
ここまで送ってくれて
今もミ○ニアムでお仕事を
しているというのに私は…)

「ああ…キ○…

ごめんなさい…キ○…♡」

あー♡♡♡

あー♡♡♡



「キ〇…♡

ああ…キ〇…♡

♡

♡

お〇〇

お〇〇

ごめんなさい…
でも、私が愛しているのは
キ〇…あなただけです…♡」



「んっ...
んくっ」

んっ

んっ

んっ



「はあはあ…キ〇…
本当にごめんなさい…」

でも、この先…

どれだけこの身が穢されようと
私はあなただけを愛し続けます

それだけは間違いありません…
だから許して、キ〇……♡」



「ク○イン総裁、また会えるのが
待ち遠しくて堪りませんでしたよ

「それは…光荣ですわ…」



ドキッ♡



おお、これがク○イン総裁の…
ふむ…少し濡れていますな」

（今日は前回より多めに時間をとってある
つまり今日はこの男と最後まで…）



「流石に恥ずかしい様子ですな
大丈夫、全て私に任せて下さい

「はい…お任せします…」

ドン

498

498

しかし、これは随分とキツイ穴だ
この分だとこちらの方は
あまり経験がないのですなあ
そ、そうですね…」



「准将殿と同棲しているものだから
私はてつきりク○イン総裁は熟練者かと…」

「キ○は…その…」

ドキッ

49

いやいや

お二人は何かと忙しい身ですからな
その様な事をする暇はありませんかね」

（キ○はそもそもこういう事には
積極的ではないし、たまにしか…）



「元々そちらからお誘いがあった故
余計にそう思ってしまったが
ほう、そうですか……」



ドキッ♡



「別は私は好きでこの様な誘いを
持ち掛けた訳ではありません……」

ええ、全ては平和の為……分かってきますとも」

（平和の為……キ○の為なのです……!）



「そうこうしている内に
こちらは良い感じに濡れてきましたなあ」

「うっ…くっ…」

ドクッ♡

んんん♡

（キ〇と最後にしたのは随分と前でしたね
…こんな男でも自分で弄るのは感覚が違う…

自分でするのとも、キ〇のとも…違う感覚…っ）



「いつまで恥ずかしがっているつもりですか？
ここはこんなになっているんですから」

「私は…べ、別につ…あっ♡」

ドクッ♡

んんん♡

今更我慢する事はありません
自分の身体に正直になって下さい」

私は我慢してなど…いませんっ

うっ…あっ…ああっ♡」



「そうですか…では、これはどうです？」

「な、何をっ…あっ♡」

そこ…耳を舐めてはいけませんっ…♡

どきどき

びびり

おや、これは思った以上に効果があったようですなあ

ペロペロ

おや、これは思った以上に効果があったようですなあ

くっ…ああ…だ、駄目ですっ♡」

（恥ずかしくてキ○にも言っていない私の性感帯…

しかし、アソコを弄られながらだと

これ程敏感に反応してしまうとは…っ♡）



「恥ずかしがらずに言ってくれれば
もっと早くこうしてあげましたのに」

「くう…ああ…あっ♡」

ドクッ

ドクッ

おっ♡
おっ♡
おっ♡

ペッ♡
ペッ♡

まあ、そういういったものを探すのも

今後の楽しみと考えれば悪くない

くく、年甲斐も無くはしゃいでしまいそうですよ」

ああ駄目…これ以上舐めては…んっ…ああ♡」



「そうです、その調子ですよ

「耳は…ああ…いやあ…っ♡」

どきどき

どきどき

おっ！おっ！おっ！

おっ！おっ！おっ！

ほほお…これは凄い
ク○イン総裁のオマ○コが洪水状態だ」

（感情を抑えようとすれば余計に感じてしまう…
溢れる液が止まらない…っ♡）



「んんっ♡あう…っ♡

「おやおや

イってしまいましたか…

！！

！！

！！

うくっ…うう…っ♡」

（そんな…まだ前戯だというのに…
キ○とだってこんな事は今までありませんでした…）

ク○イン總裁の姿を見ていたら私も辛抱堪りません
前戯はこの辺で…くく、はじめましょうか」

！！

！！

「おお…肌を晒し横たわる姿、堪りませんな
痩せこけ枯れ果てた私の妻とは
比べようもない何と若く美しい身体だ…
ふふふ、今からこの女体を私の自由に…」



（こうしていざ始まる前になるとやはり怖い…
男のギラギラとした目、いやらしい口元を
見ると身体が震えそう、恐怖を感じますわ…）

「あの…出来れば優しく…
乱暴なのは好きではありません…」

「おっと、ご心配を
させてしまいましたかな？
申し訳ありません、年甲斐も無く
興奮してしまいました」

ですがご心配なく
こう見えても私は紳士ですので
決して乱暴になど致しません」

はい…」

（私にはその言葉を信じるほかありません
せめて事は静かに、早く済んで欲しいですわ…）



「では、早速失礼して…」

「あ、あの避妊具はちゃんと付けて下さいね…っ

大丈夫、付けてますよでは、ク○イン総裁…」

は、はい…

ど、どうぞ………っ」

(キ○、ごめんなさい…)



「あっ！んっ…くう…っ！」

「おお…これが総裁の…」

あのラ○ス・ク○インのマ○コか！

実に良い締め付けだっ

それにゴム越しでも伝わる

濡れ具合…最高だっ！」

んっ

んっ

んっ

その様な事、声に出さないでっ…
お願いですからもう少し静かに…っ」

（この男のモノは
キ○とはまた違う感覚…

大きくゴツゴツとしていて
より男性的な性器…

キ○しか知らなかった
私の中にこの様な
大きなモノが…

立派な男性器が
子宮を押し広げてきますわ…っ



「先程は紳士だと言いましたが
この様に興奮する体験を味わい
流石の私も冷静ではいられません！」

少々手荒くなる事を
お許し下さいっ！」

「やっ！ああ…っ
そ、そんな…っ！」

乱暴は嫌ですっ…
お願いですから痛くしないで…っ！」



「そう言われると男というのは
ますます興奮する生き物っ！」

くう…お許しをっ！」

「あっ！ああっ…！！
んっ…んん…っ！」



（…変ですね、これだけ激しく突かれているのに
痛くない…寧ろそれどころか気持ち良い？
この様な男にこんな乱暴にされているのに…？）

「あっ♡
んんっ…ああっ♡」

（キ○はもっと優しく抱いてくれます
一つ一つ丁寧にお互いの愛を
確かめ合う様に…）

性行為というのは
その様に愛し合う2人が幸せを感じ合う
行為なのではないのですか…っ!?)



これはまさしく名器っ！

「うっ…あぁっ♡」

あっ……ああん♡」



（この様な…まるで獣に貪られる様な形で快感を得るなどと…っ）

「ぐっ…ク○イン総裁…っ
まもなくです…っ
出る…出ますよ…っ！」

「ああっ♡だ、駄目っ…
これ以上は…いけませんっ♡」

びん

びん

びん

びん

びん

（これ以上されたら何かが…
何かが来てしまいます…っ♡）

「うぐっ…出るっ！
イクッ…！」

「あっ♡」

「んっ♡」

「あああっ♡
んっ…♡」

「んっ♡」

「んっ♡」



「ああイク…」

ク○イン総裁のマ○コでイク…っ」

「あっ…ああ…♡」

んっ！

んっ！

んっ！

んっ！

んっ！

（もしやこれがイクという感覚？

これが…これがイク……♡）



「ふう…ク○イン総裁
本日はとても良かったですよ

「うう…は、はい…

あの…今後も協力をお願いします…

勿論です、一日でも早く

世界の平和を目指しましょう」

はい…その通りですね…」

（その為にもこの関係は続けなくてはならない
この肉と肉が交わる関係を…）



翌日



キ○の為とはいえ
あんな事を
してしまった後だと
気が引けてしまいます。

キ○を想い行動した結果
私の心は
罪悪感でいっぱいです。

そんな事、始めから
分かっていたのに
私は何を今更…。



私がこの身を捧げる事で

世界の平和が…

キ○が戦わなくてよい

世界が訪れるのなら…

キ○は心の底から

苦しんでいるのです。

世界から争いを

無くすのだと…

まるで自分一人だけで

それを成そうと…。



キ○にだけそんなものを
背負わせはしません。

私が：

私にだけ出来る事で

キ○の力になれるのなら
やるべきなのです。

争いのない世界で

キ○と2人で

生きていく為に…。



「急な呼び出しにも関わらず
こうして来てくれた事心から感謝します
「か、構いませんわ
丁度、近くに来ていたので…」

んー

あと一時間程で
会議が始まりますので
それまでは2人きりで楽しみましょう
…申し訳ありませんが
今日は何だかその様な気分には…」



「そんな事仰らずに
ちよつとした息抜きだと思って
私との営みを楽しんで下さい

「……え、ええ
そ、そうですわね……」

んんん

何です？

同居している准将殿の事でも
考えているのですかな？」

あ、あの……それは……っ」



「何も気にする事などないでしょう
私達がしているのはビジネスです」

私は別に准将殿からク○イン総裁を
奪うだとかそんな大それたことは
考えていません



楽しもうと言ったのも
仕事を楽しくしたい
というだけで他意はありません」

「こ、これはビジネス…
楽しくお仕事をするだけ…？」



「そうです
後ろ向きな仕事であっては
良い結果にはなりません
ク○イン総裁も
そう思いませんか？」

「そ、それは…
そう思いますけど…」

（これは私がキ○の為に始めたお仕事…
総裁である私にしか出来ない
平和の為の大切なビジネスですわ…っ）



「でしたら、
仕事が上手くいく為にも
今は余計な事は考えずに
私との行為にだけ
専念すれば良いのです」

「……っ」



（口ではこの男に合わせているけど
やはり、楽しむというのは…
そんな気持ちでこの様な行為を
続けていたらキ○への罪悪感が
ますます募るばかり…）



「さあク○イン総裁
肩の力を抜いて…
私に身を委ねるのです」

「あっ…んふっ…」

（またしても乱暴なキス…
舌と舌が絡み合って…
凄くエッチなキス…♡）



「私のキスがお気に召したのですかな？
今一瞬、総裁のマ○コが締まりましたぞ！」

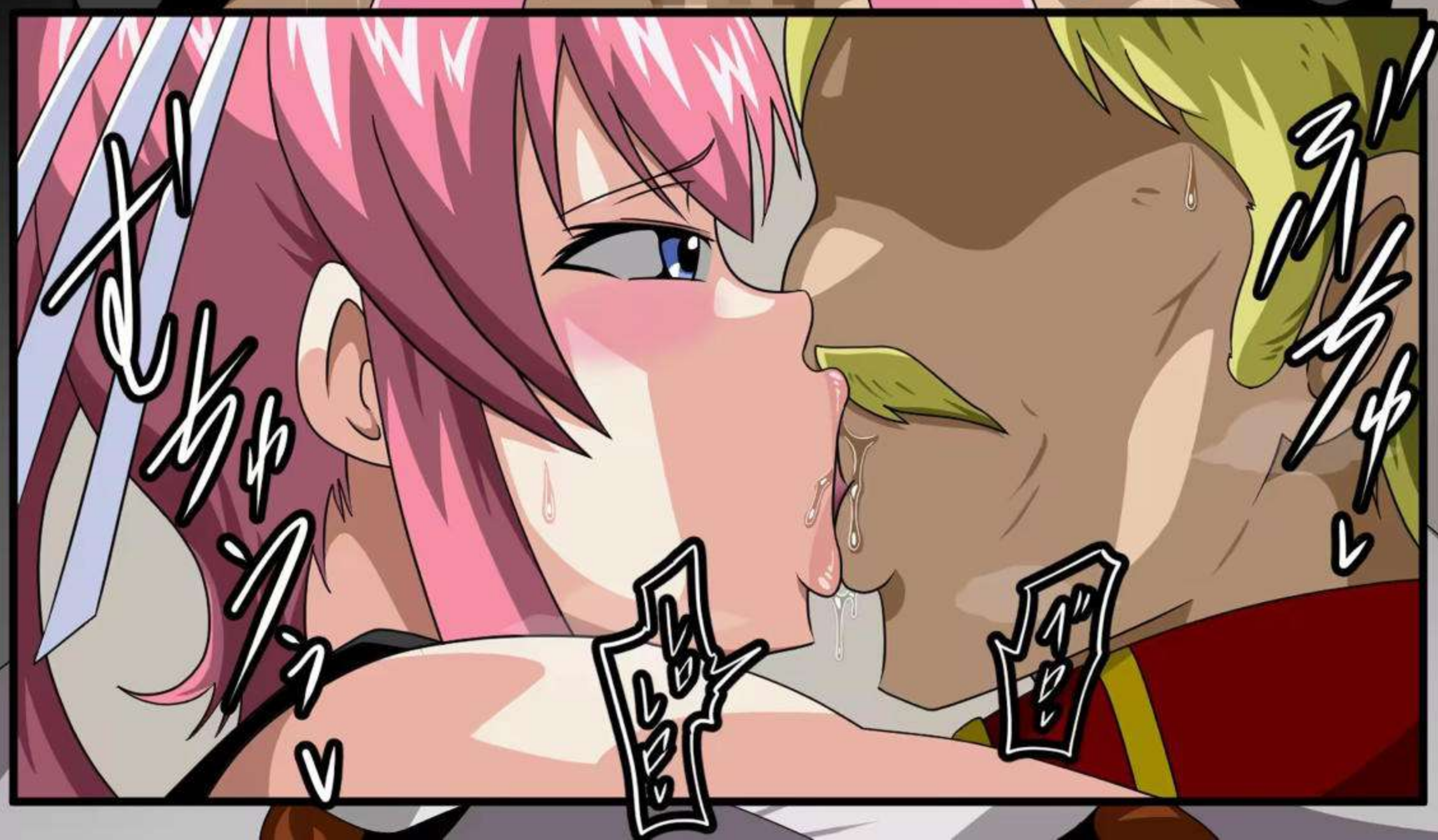
「そんな…」

私は分かりませんっ…」

いずれキスだけで濡れる
マ○コにして差し上げますよ！」

（嫌っ…そんな破廉恥な…

エッチなオマ○コは嫌ですわっ！）



「ゴム越しでも伝わる実に良いマ○コだっ…
こちらにもますます力が入るというものだ…!」

「んっ♡

あっ…ああっ…

んくっ…んんっ♡」

（感じますわ…

私の中を通じてこの男のモノが

より熱くなっているのが…

本当に熱くて硬いモノが

私の…オマ○コに…っ♡）



（ですが、

所詮キ○の敵ではありませんわ…

愛する人のモノこそが…

キ○のオチ○ポこそが

私を幸せにしてくれるのですから…

これはお仕事なのだから…

少しくらい気持ち良くなつて

そんなことは問題ありません…っ



この日を境に男は
私との密会の回数を増やし

キ〇は新兵器『プラウドディフエンダー』
の開発・調整に追われる日々…
すれ違う時間が増えました。

寂しさはあれど、
キ〇に会う時間が減った事で
キ〇への罪悪感は多少薄れた気がします。

そうやって自分の気持ちから逃げている内に
私の中で徐々に何かが壊れ始めているのを感じました。



二
分
月
後
...

「ほほう、これがク○イン総裁のパイロットスーツ…
世界平和監視機構の長ともあるうお人がこの様な
スケベな恰好をなさるとは、全くけしからんですな」

「そんな…
可愛いスーツだとは思いますが…」

（いつにも増して興奮している…
この恰好が余程気に入ったみたいですわ）



4
7
♡

「どれどれ

もっと近くで見せて頂きますよ」

「はい……どうぞ……」

ぽふ



（男の要望だったとはいえ
やはりこの姿でというのは
恥ずかしいですわ……）

「うむ、パイロットスーツはボディラインが
ハッキリするのが堪りませんな

そしてその点に関して言えば、
このスーツには胸当てがなく
胸の形も丸分かりだ」



「うう…
言わないで下さい」

ぽんぽん♡

ぽんぽん♡

ぽん♡

「これは戦場ではなく、
ベッドの上で着るものと
言われても不思議ではない

それ程スケベなスーツですよ」

ドキ
ドキ

「ああ……もう……
嫌ですわ……」

（そんな風に言われると、
私も身体が熱くなってきました……）



「やんっ♡」

「確かこのスーツは
何やら新素材を使っているのでしたな

ほう、これは素晴らしい触り心地だ
流石は新素材と言った所ですかな」



（相変わらずのいやらしい触り方…
今ではすっかりこの男の手の大きさを、
お尻や胸の揉み方まで身体が
覚えてしまいましたわ…♡）



「いやあ、本当に素晴らしい素材だ
ク○イン総裁の大きく柔らかい
お尻の感触がとても良く伝わってくる」

「うっ…
ああ…あんっ♡」

（この男に触られるだけで
エッチをするのだと身体が
反応してアソコが濡れてくる…
私の意志とは関係なく
準備をしてしまいますわ…♡）



「ほほう、これが新素材の性能か
パイロットスーツなのに
中の汁が浮き出してきましたぞ

「えっ!?
んっ…あぁっ♡

既にク○トリスも充血している様子…
ク○イン総裁もご覧下さい
この立派に膨らんだご自身のク○トリスを」

い、嫌っ…♡

その様なもの見たくありません…っ♡」

おっ♡♡

んっ♡♡♡

っ♡♡♡♡

んっ♡♡♡

「良い…素晴らしいですぞ
スーツ越しから見るク○イン総裁の
勃起ク○トリス：
くつきりと浮かぶスケベオマ○コ♡

「ああっ…嫌あ…♡
オマ○コ嫌ですわっ…♡

嘘はいけませんな
先程から凄い勢いで
マン汁を垂らしておいて…♡」

うう…ああ…んっ♡
身体が…勝手に…っ♡」



「ほらっほらっほらっ！
これが良いのでしょう!？」

正直にお答え下さいっ！
マ○コ気持ち良いのでしょう!？」

「あっ♡あっ♡ああっ♡
あん♡ああん♡

き、気持ち良い……っ

オマ○コ気持ち良いですわっ♡」



「そうです、私はク○イン総裁の本音が聞きたかったのです
フフフ…正直にお答え頂きありがとうございます

「んっ…♡はあ…はあ…♡
まだ始まったばかりだというのに
オマ○コがグチヨグチヨですわ…♡

では、そろそろベッドへ…」

ええ、そうですね…♡」

（早く続きを…
もっと気持ち良くなりた…♡）



「んっ…♡」

「本当に素晴らしいスーツだ

手に吸い付く感触、最高の抱き心地です」

（私も…身体を程よく締め付ける

スーツの着心地が気持ち良い…♡）



442♡

「んふ…♡
んっ…んむう♡」

（それにパイロットスーツを
着るといふ背徳感が余計に
私の身体を熱くさせますわ…♡）

ちゅっ♡

ちゅっ♡



すにっ♡

すにっ♡

すにっ♡

「全く、改めて考えてみると信じられない出来事だ
この私がああのだら○ク・クラインと毎週のように
身体を重ねる日が来ようとは…」

「その様な事…
今更何を言うのですか…」

ちゅっ♡

おちゅっ♡

そう…今更…
それがどれだけ幸せな事か♡
お褒めの言葉…光荣ですわ♡



「こうしてク○イン総裁の生マ○コに
直に触れる事すら当たり前になってしまった…♡

「あっ♡んんっ…くう♡

簡単に入りましたな

やはり中はグチヨグチヨだ♡」

んあっ♡あっ…ん♡」

あっ♡

ん♡

（ようやく指が入ってきましたわ♡
彼の…太くてゴツい指が私の中に…♡）

ぬちゅ♡

ん♡

あっ♡

あっ♡

ぬちゅ♡

ちゅ♡



「どれ、それでは中の具合を
よく確かめてみましょうか♥」

「んああ…あうっ♥
よ、宜しくお願いします…♥」

（私のオマ○コが彼の指で掻き回されている…
適度に私の気持ち良いところを刺激して
焦らしてくるのが何ともドキドキですわ…♥）



「んむっ…んっ♡
あっ…ああ…んふっ♡」

（ああ…そこっ♡そこですわ♡
そこをもっと…ああ♡
指の先でもっと突いて…♡

そこっ♡その部分をっ♡
指の腹でグイグイと
押し付けて欲しいっ…♡



んっ♡

あっ♡

ぬっ♡
ちゅ♡

あっ♡

んっ♡

あっ♡

ぬっ♡
ちゅ♡

ちゅ♡



「んはあ…っ♡」

「んおっ!!」

んはあ♡



(この様な感じに…強く押し付けてっ♡
貴方の指で…刺激して下さいっ…♡)

んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

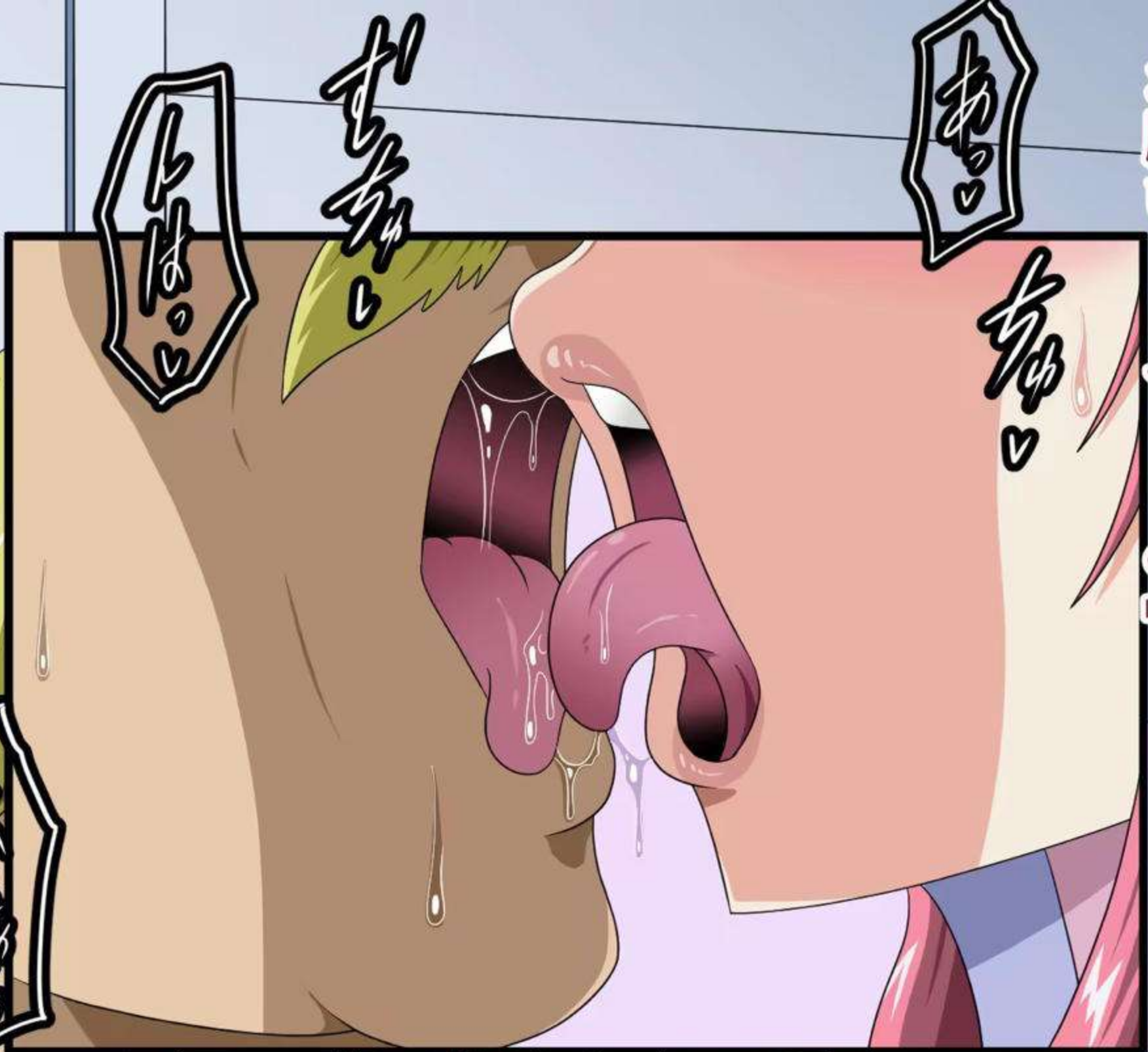


んはあ♡

んはあ♡

んはあ♡

「焦らさないで…
もつと気持ち良く…
お願いします…っ♡」



「ク○イン総裁…っ
分かりました…っ♡」



（私ったら何とはしたない…
快樂欲しさに自ら懇願するなど…

ですが
このまま
生殺しは
辛すぎます…



ああ…
キ○、ごめんなさい…っ♡（

「ああっ♡
そこっ…それですっ♡

「ここが…
ここを触られるのが
良いのですね？」

はいっ…
そこですっ♡

あっ…ああ♡

指が…っ

オマの♡

気持ち良いですわ♡

では、もう暫く
続けましょう♡」

（気持ち良い…
もっ…もっとして…♡）

あ♡

あ♡

あ♡

あ♡

（イク…
イってしまっ…っ♡）

あ♡

あ♡

んああっ♡
あ、ああ…く、来るっ…♡」

ん♡

あ♡

あ♡

あ♡

「んんっ♡」



（まだ前戯だというのにイってしまいました…
彼とする時はいつもそう…
総裁らしからぬ不甲斐ないオマ○コですわ…♡）



「ほほお、今日は一段と凄

「あっ♡あぁっ♡

手マンをした後とは言え
これ程ぐちょ濡れとは…♡」

んあぁっ♡

そこっ…良いっ

とても良いですわ♡」

あぁ♡

びゅん♡

あぁ♡

あぁ♡

4♡♡

あぁ♡

あぁ♡



（声が：感情が抑えられない
これがはしたない事だと
分かっていても我慢出来ないっ
先程同様、身体が求めてしまう
もっとして欲しいと…
願ってしまう♡）



「如何ですか？」

私のクンニの具合は？

「は、はいっ…」

とてもお上手で…

私の気持ち良い所を
的確につ…♡」

勿論です

私とク○イン総裁は

何度もお相手した

間柄ですからね…♡」

あゝ♡

ドクン♡

あゝ♡

あゝ♡

4♡♡

あゝ♡

あゝ♡



「んあぁっ♡
そんなに激しく吸っては…
くっ…あぁんっ♡」

（私のオマ○コを吸う
下品な音が部屋中に響いて…
何ていやらしいっ…♡

ああ…駄目…感じる♡
オマ○コからエッチな
汁が溢れてくるっ…♡）

んっ♡

んっ♡

んっ♡
んっ♡



「その様な声を聞かされては
こちらますますやる気が
出るというもの…」

ここからは
更に激しくいきますよ♡」

「そんなっ…
これ以上激しくだなんて…
私…もちませんっ♡」



「あっ…あああっ♡

し、舌が中に入って…

オマ○コの中で蠢いているっ♡

そんな…隅から隅まで

まんべんなく舐めては…

ああっ♡んはっ♡

だ、駄目え…来るっ…

来てしまいますっ♡」

んっ♡

んっ♡

あっ♡
ああっ♡



「ああああっ♡」

（今度はクンニで
イってしまいます♡）

うーっ♡
あーっ♡
うーっ♡

うーっ♡
あーっ♡
うーっ♡

うーっ♡
あーっ♡
うーっ♡



「これは珍しい
ク○イン総裁が潮吹きされるとは…
くくく、何と光栄な事でしようか」

「も、申し訳ありません…
思わず抑えきれず
噴き出してしまいました…♡」

（二度もいった快感で
身体が痙攣している…
しかし本番はこの後…
これ以上の快感を
受けたら、私は…♡）

はぁ♡

はぁ♡

ド
ッ
♡

ド
ッ
♡



「あ、あの…」

ゴムが付いていませんが…?」

「すいません

うっかり切らしてしまいました

いや、困りましたなあ…」

（いつかやるとは思っていた…
忘れたふりをしてゴム無しで
やる日が来るだろうと…）



「くっ……うう……♡」

（ここまで来て……これ程までに
身体を火照らせて今更お預けなどと……
それはあまりにも酷というもの……）

「いやいや、私としたことが
本当についうっかり……
これでは本番は出来ませんなあ……」



（この切なくなっているオマ○コにオチ○ポを
入れられないなんて…そんなの嫌…嫌ですわっ

…でも、だからといってこの男と
ゴム無しでするというのは流石に…

ドキ
ドキ

今日は安全日…仮に中に出されても
大丈夫だとは思いますが……）



「あ、あの……」

「ク○イン総裁、大変申し訳ないのですが
せめて素股で私のモノを擦らせて下さい」

えっ!?

あ……は、はい……っ」

（私っただらもう少しで……）

それにしてもまさか向こうの方から
その様な事を言うてくるなんて……）



「それでは失礼して…動きますよ」

「あっ…♡
くう…♡」

これは…なかなか…♡」

（この男なら無理矢理にでも
入れてくると思ったけど…
とにかく、これでいいのです…）



（いくら何でも生ですというのは……
それだけは決してあってはなりません……

「ク○イン總裁の
ヌルヌルマ○コが何ともいい具合だ……」

「そ、それは良かったですわ……っ」

これで……これで良かったのです
このまま終わりさえすれば……っ



「あっ…

「んんっ♡

…え？これ…入ってる…!?

おっと勢いあまって
入ってしまったな…♡」

あっ♡

ぴん♡

そ、そんなっ…駄目です！
今すぐ抜いて下さいっ…!!」

うっ♡

うっ♡

うっ♡

♡

「私は構いませんが、
ク○イン総裁はそれで良いのですか？」

「…どういう意味ですか？」

いや、言葉とは裏腹に私のモノを
離してくれようとしないので…♡」

…っ♡」

（求めていたモノがやって来て
私の身体が離すまいとしている…っ♡）

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

グッ
グッ
グッ

「やつ…ああっ♡

だ、駄目っ…動かしては…っ♡

「そんな事言って、このマ○コのうねりは
気持ち良いという証拠でしょう?」

んっ♡これは…ち、違います…っ♡」

ドク

ち○

ち○

（ああ♡入ってるっ…待ち望んだチ○ポが…
キ○以外の男の生チ○ポが私の中に…っ♡）

チ○

チ○

チ○

チ○

「生でしてるだけでこんなにも態度を変えるとは…
准将殿の事を気にされているのですか？」

「も、勿論です…っ」

私にこの様な交渉を持ち掛けておいて
それを今更…生かそうでないかなどという
些細な理由で嫌がられるとは…」
些細な理由ではありませんっ…!!」



「いや、厳密には嫌がるふり…でしょう？
分かっていますよ、あなただってこうなる事を望んでいた…」

「な、何を…」

私は決してその様な事を望んでは…っ

チ○ポが欲しかった…早く入れて欲しかった…
私に隠し事は無駄です、素直になって下さい♥
そ、それは…しかし…このままでは…っ♥」



「妊娠を気にしているなら、後で薬を飲めばいい
ですから、今はこの瞬間を楽しみましょう……♡

「くっ……ああっ……はああ……っ♡
やっ……嫌っ……激しい……っ♡

ふっ……これがお好きなくせに……
ク○イン総裁、まだ素直になれませんか？」

わ、私は……っあっ♡
ああ……んんっ……だ、駄目っ……♡」



「それでしたら、身体に
直接聞いてみるしかありませんな…っ

「あっ…あんっ♡
だ、駄目っ…いけません…っ
中に…中に出しては…っ♡

「いきますよ…ク○イン総裁…っ♡」

「や、やめて下さいっ…
それだけは…いくのなら外に…っ♡」



「うおおおっ！
イクウウウッ！」

ブルッ

あああ

ブルッ
ブルッ
ブルッ

「ああああっ♡」



「うおっ!?

おおおっ…搾り取られるっ!」

「んああああっ♡」

おんっ♡

おんっ♡

おんっ♡

（オマ○コが勝手に…!?
チ○ポ締めつけてるっ…♡）



「はあ…はあ…やれやれ…何とも我が儘なマ○コだ…♡
あれだけ嫌がっておいで、しつかり搾り取るとは…♡」

「ああっ…♡う、うう…っ♡
キ、キ○…ごめんなさい…っ」

「はあ…♡」

「はあ…♡」

（ついに中出しを許してしまった…
私は…ここまでするなど考えていませんでした…
そう…始めはそうだったのに…
それなのに私は結局流されて…）

「はあ…♡」

「はあ…♡」

「准将殿に謝るのは全て終わってからにして下さい
なにせ、まだ始まったばかりなのですから…♡」

「うっ…ああ…っ♡」

（分かっています…）

はぁっ♡

はぁっ♡

私の中から引き抜かれたモノが
まだこんなにも元気な姿を見れば…

この男と関係をもって、身体は支配されたも同然…

私はいつまで理性を保っていられるのか…（…）

ド
ン

ド
ン



「一発終えて前戯も済ませた事だし
さあて、続きといきましようか……♡

「……っ

どうしました？
まさか嫌という訳では
ありませんまい？」

っ、次も中に
出すつもりですか？」

（白々しくも私は
分かりきった事を
聞いてしまう……

せめてもの抵抗……
本当に情けない……）

木カッ

チン……

木カッ♡



「お言葉ですが既に中出しをしてしまった
今更やめた所で事態が
変わる訳でもありませんよ？」

（確かに賽は投げられた…

私の手によって…

それをここで

やめたからといって

結果は変わらない…

それでも

中出しだけは…

だけど、身体は…

まだ欲している…

何ものにも

覆われていない

男性器を…

男の熱い精液を

一時の快楽の為に

求めてしまう…♡）



「だ、駄目です…っ」

（男の…彼のが欲しい…♡
欲望剥き出しの熱いチ○ポを
私の中に入れて欲しい…♡

もう二度と…中に出すなどとい
う事は…いけません…っ

変態おじさん
ナチュラルの
ズル剥けチ○ポで
強引に犯して欲しい…♡

もう中には…

中出しだけはどうか…っ」



「問答無用っ！」

いきますよ、ク○イン総裁！」

「うあああっ♡」



（来た…また生のチ○ポが…）

私のオマ○コ目掛けて

一直線に入ってきてきましたわっ♡）

「先程同様言葉とは裏腹に
この締め付け具合…っ
大した淫乱総裁ですなっ！」

「んはっ♡

ち、違いますっ…♡

あゝ♡

んっ♡
あゝ♡

こ、これはっ…
違うのですっ…♡」

（やっぱり気持ち良い…っ
身体中が快感で痺れる…っ♡）



「私にも伝わってきますよ
ク○イン總裁の…いえ…
ラ○スの感じている快感がっ！」

「んんっ♡

あっ…んああっ♡」

あっ♡

んんっ♡
あんっ♡

（駄目…気持ち良すぎて
もう何も考えられませんか…っ♡）



「可憐で美しく気高いお方…
多くの人々を導く存在である
ラ○ス様の本性をこの私が
全て曝け出してあげますよっ！」

あーっ

んっ
あーっ

「あっ♡んはっ♡」

（もっと突いてっ…

私の中を滅茶苦茶にして下さいっ♡）



「ううっ…！」

出るっ…うおおお…っ

二度目の膣内射精っ…！
いくぞ、ラ〇スっ…！」

あゝ

んっ
あゝ

「あああん♡
嫌っ！嫌っ！嫌あっ！」

（来て来て来てえっ♡
中に出して下さいっ♡）



A close-up of a character's face, focusing on the forehead and upper part of the head. A large, stylized 'X' mark is drawn on the forehead. The character has brown skin and is wearing a yellow and white striped garment. The background is a solid light blue.

A hand-drawn illustration of a piece of paper, possibly a card or a scrap of paper, with a rough, torn edge. The paper is light brown and features the letters 'K', '1', and 'v' written in a simple, hand-drawn style. The background is a solid light brown color.

「ああ……はあ……はあ……っ♡

「はあ……はあ……

とても良かった……本当に……♡

フレイ……♡

♡♡♡

また……中で……

してしまいましたわ……♡」

嫌がっておられましたか

結果的にご満足されたご様子で何よりです」

はあ……♡

はあ……♡

♡♡♡

「…あの…まだ時間も

その…ありますし…

宜しければもう一度…♡

「ク○イン総裁が

良いのなら喜んで…

フレイヤー…♡

フレイヤー…♡

それと…

2人きりの時は

ラ○スと…お呼び下さい…♡」

…分かりました

ラ○ス…♡」



これまで彼に抱いていた不快感は消え去り
自ら進んでゴム無し生ハメセックスを
要求し、そして何より…

「ラ○スと…お呼び下さい…♡」

この発言には
私自身驚きました。

私はそこまで
彼との行為を望んでいる…

この後も私は彼に何度も抱かれ
関係はより親密になっていきました。



彼に中出しを許した日から数日後…

この日は彼の方から私に会いに来ていました。
場所はオ○ブに停泊しているミ○ニアムの一室。

現在、キ○や数多くのクルーがここで作業をしています。
その様な場所で私は…私の仕事をしている…。



これが私の仕事…それは間違いありません。
しかし、最近では目的と手段が入れ替わっている…。

その自覚がある私はこれが私の仕事だと
自分に言い聞かせながら彼との密会を楽しんでいます。



「少しキスを交わしただけでラ○スの中が
こんなにも濡れているとは…」

二本の指がすんなりと入ってしまいましたよ

「そ、その様です…ね…」

んあっ♡

んあっ♡

准将殿達がいるミ○ニアムの中で
この様な事をしてるのが原因でしょうか？」

そ、それは…

もう…意地悪しないで下さい♡」



んあっ♡

フッ
チュ♡

フッ
チュ♡

「いやしかし…これは凄い有様です
今すぐ私の肉棒が欲しいと…
まさにそう言っている様な状態ですな

「…いけませんか…?」

んんん

んんん

滅相もない
ラ○スが望むなら私は喜んで…」

では、誰かに怪しまれる前に
手早くお願いします…♡」



「……ラ〇ス、ラ〇スいるかい？」

「キ、キ〇ッ……!?」

「おかしいな、確かこの辺りに……」

ド
ン
ッ

「仕方ありません
今日はここまでにしめましょう」
……は、はい
そうですね……」

ん
ん
ん
ん
ん



「ごめん、カ○リが話があるって連絡が…」

「い、いえ…」

あの方も急用が出来たらしいので…

そうなんだ、大変だね

身体を壊さないといいけど」

ええ

心配ですわね…」



こんな中途半端な状態で…
彼もわざわざこちらへ出向いてきたというのに
待つという選択もなくあっさりと帰るなんて…

しかも、去り際に

この後一週間は会えないと言っていた...

私の身体をこんなに熱く
させて一週間もお預け...
そんなのあんまりですわ

私はそんなに我慢出来ません...
彼だってそれは分かっているはずなのに...



「キ〇…今日の帰りは…」

「うん、今日はそんなに遅くならないと
思うけど、一緒には帰れないかな」

それでしたら私

夕食の準備をして待っていますわ

ありがとう、ラ〇ス

それと…入浴も済ませておきますので
キ〇も夕食後に早めに入浴を済ませて
今夜はその…久し振りに…」

えっ!? それってつまり…」

「私の方からこの様な誘いは
女性としてどうかと思いますが…」

「あっ、いや、そんなの気にする事ないよ
寧ろ悪いのは僕の方だよ

ごめん、ずっと忙しくして
そういうのに気が回らなくて…」

そんな…キ○の方こそ
気にしないで下さい」

こんな状態でキ○を誘う私こそ最低ですわ
彼の穴埋めの為にキ○を利用するみたいで…

「それじゃあ
今日はなるべく早く帰るから

「はい
まずはその前にお仕事ですわね

あまり待たせると
カ○リがうるさいだろうし
急ごうか」

まあ、キ○つたら」

いえ、違います
穴埋めなどではありません…

キ○は私にとって最も大切に愛する人
キ○との行為は何より望む事なのです



「何だか久し振りだと
恥ずかしいね」

「え、ええ…
そうですね…」

あ
っ
っ
っ



（本当に久し振り…
キ〇とするのは
いつ以来だったかしら…）

（久し振りに見る、キ○の…
今まさに私の中に入ろうとしている
それは何とも可愛らしくて…

彼のと比べると割と平凡で
こんなものだったか
というのが印象で…

少し拍子抜けして
しまいました…



「それじゃあ
入れるよ…」

「はい…」

《私ったら

いよいよという時に
気を落としているなんて…

キ○のが
少し小さいからって
気にする事ないですわ

キ○、早く来て
あなたと繋がればこんな気持ち
きつと晴れるはずだから…っ)



「うっ…ラ〇ス…!!」

「ああ…キ〇♡」

（やはり

少し小さい…

でも、キ〇の凄く熱くて

気持ち良いですわ…♡）

ズ
ズ
ズ

うっ

動かすよ…」

ええ、存分に…♡」



(キ〇…私に気を使って
加減しているの?)

その様な気遣いは無用です
もっと激しく突いて…っ♡)



「キ、キ〇…遠慮はいりません
どうぞ、もっと好きなように
して下さい…♡」

「だ、だけど…」

それだとラ〇スが…

平気です

私を愛しているなら
全力で…私を求めて
思い切り抱いて下さい♡」

久し振りだから
加減してたけど…
キミがそう言うのなら
僕はその気持ちに応えるよっ」



「ラ〇ス…ラ〇ス…っ
愛しているよっ！」

「ああっ♡
キ〇っ…私も…
愛してますわっ♡

ラ〇ス…っ！
ラ、ラ〇ス…っ！

キ〇もっ♡
もっ♡と激しく…っ」





「うっ…！」

うう…あっ…！」

「キ、キ〇!?
あっ………」

えっ!?

あっ…

「久し振りでペース配分も考えずにしたものだから…
ごめん、ちよつと早かったよね？」

「それは…はい…あっ！
いいえ、まああの…
ちよつと…だけ…」

そ、それよりっ
キ〇、どうして
外に出したのですか？」



えっ？だって
いつもそうだから…
ゴムをしない時は
必ず外につて…
そう話したよね？」

「えっ…あ…」

「そう…でしたわね…」

《私達には世界を

平和にするという

やらなければ

ならない事がある…

それまでは

気を付けようと

二人で決めた…

…だけど…」

「…ラ〇ス？」

「ごめんなさい

私…今夜は

何だか変ですわね」



「そうだね…」

昼間は僕にベッドの誘いまで
してキミらしくないかもね

「そうですわよね…」

でも、そういう気持ち
抑えられない時だって
ラ○スにもある…
僕は全然構わないよ」

ああ…キ○…
ありがとう…」

（優しいキ○…

やはり、私はあなたの
そういう所が好きです）



「それでは…

お言葉に甘えて…

もう一度、宜しいでしょうか？

「うん、そうだよね

さっきは僕だけ

果ててしまって

ごめん…

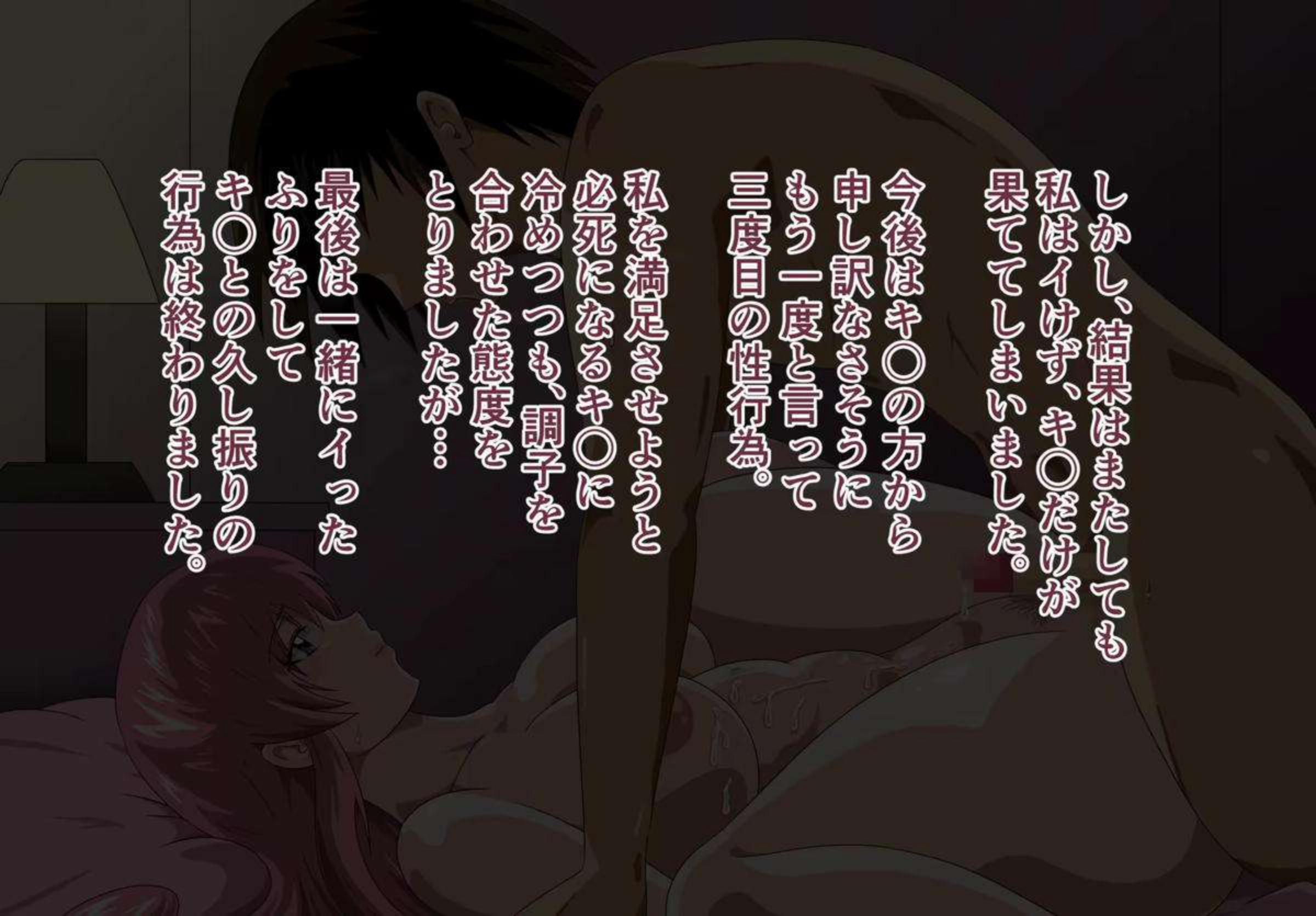
次はラ○スも

一緒に…」

はい…

キ○、あなたと一緒に…♡」





しかし、結果はまたしても
私はイけず、キ○だけが
果ててしまいました。

今後はキ○の方から
申し訳なさそうに
もう一度と言って
三度目の性行為。

私を満足させようと
必死になるキ○に
冷めつつも、調子を
合わせた態度を
とりましたが…

最後は一緒にいった
ふりをして
キ○との久し振りの
行為は終わりました。

キ○は頑張ってくれました。
でも、私の身体はもう

キ○との行為では
満たされなくなってしまった。

その事実には落胆し、悲しみ……
そんな自分自身が
何よりも許せませんでした。

自らが招いた結果……
自業自得なのです。

それでもこのモヤモヤとした
気持ちを晴らそうと
私はオナニーに耽っていました。

「こんなのじゃ駄目……
一人でしたって……これでイッたって
後で切なさが増すばかり……っ♡」

それなのにキ○は
また私を放って
開発に夢中で
帰って来ないなんて……っ♡」



「…あの人に…彼に…
早くこの切なさを
どうにかして貰わないと…っ♡」

でも、彼にも暫く会えない…
早く…今すぐにだって
彼のチ○ポが欲しいのに…っ♡」



彼に会えるのは一週間……
そう言われてから僅か三日後

私は自らの欲望を
抑える事が出来ず、彼に連絡をした……

全て理解していました。

彼は始めから
こうなる様に仕向けていた……

私は彼の罠に
自ら進んではまったのです。



「おやおや、
部屋に入るなり
服を脱いで
私に抱きついて
くるとは…」

「申し訳ありません…
ですが、ずっとこうしたかったのです

あなたとこうして…
身体を重ね…交わりたかった…♡」



「ほう、この私と……
嬉しいですね

しかし、ラ○スには
准将殿がいるじゃ
ありませんか

「それは……キ○は忙しいのです
今は特に……私に構う暇などありません

そうですか……ですが、私なら
どれ程忙しくてもラ○スを
放っておいたりはしませんかねえ」

……っ♡」

19♡ 29♡



「んっ…♡
お願いです…」

はぁ♡

はぁ♡

早く私に…

あなたの…入れて下さい♡

「私の…何です？」

あなたの逞しいチ○ポを…
お願いですから、早く…♡」



「私のチ○ポを
どこに入れて
欲しいのですか？」

「もう…」

意地悪です…ね…♡

いやいや、滅相もない
ラ○ス様、どうぞこの私めにご命令を

私が…あなたに命令…?」

はい、これより私は

ラ○ス様の忠実なる下僕となります
ですので、何卒私めにご命令を」



「仕方ありませんわね……
そ、それでは……」

世界平和監視機構コ○パス総裁

ラ○ク・クラインが命令します

あなたのいきり立つチ○ポを

私のオマ○コに挿入しなさいっ♡」

「おお！ 凄い迫力だ！

流石はラ○ス様ですな！」



「茶化さないで下さい
さあ早く
言う通りに
しなさいっ♡

「うーん、何だか急に命令に
逆らいたくなってきたなあ♪

くくっ！

忠実な下僕ではなかったのですか？」

そうなのですが…

ふふふ、どうしましょうかねえ♪」



「命令違反は
許しません……っ」

さあ早く
挿入しなさい♡

レ♡♡♡

4♡♡♡
4♡♡♡

「んはっ……ラ○ス様……っ」

既にビンビンにしているくせに……
痩せ我慢をしないで下さいっ♡」

（本当にじれったい……）

それなのに彼とのやり取りは
胸を……子宮を熱くさせますわ……♡）



「ラ○ス様…
例のパイロット
スーツは…っ？」

「ちゃんと持ってきました
後で着て差し上げますから…」

とにかくまずは入れてっ♡
あなたのチ○ポを…
今すぐ入れなさいっ♡」



「畏まりました
では、失礼します」

「んんっ…
ああん♥」

トーン

（念願のチ○ポが
私のオマ○コに入った…♥

私の子宮が求めていたモノ…
彼の…このチ○ポ…っ♥）



「ラ○ス様、私の
チ○ポの具合は
如何でしょうか？」

「え、ええ…

とても良い
ですわ…♡

それで…次のご命令は？

私が動きますから、あなたはそのまま…

勃起を維持、可能ならもっと熱く…

大きくさせなさいっ♡」

畏まりました…♡」



「ああ…良い…♡
腰振りが
止まりませんっ♡」

（キ○とじゃ出来なかった
この獣みたいな性を貪るセックスが
とても心地良く…そして身体を熱くさせる♡

私が望む性行為とはこういうもの…
それを叶えてくれる彼は…
もう私には必要不可欠な存在…♡）



「さあ…主砲発射の
準備は整いましたね…♡」

放ちなさい…

私のオマ○コに
熱く濃厚な一撃を
ぶち込みなさい…っ♡」

（早く早く…精液流し込んで♡
二人で一緒に気持ち良くイきましよう♡）



「お言葉ですが
それはまだ
出来ません…」



本日は溜めに溜めて…
ラ○ス様を完全に堕とす一撃を
放ちたいと思いますので…っ

「私を…完全に堕とす……」

ご承認頂けますか？」

その一撃に興味があります
分かりました…承認します♥」



「んあっ♡
あっ…あっ♡」

んあっ♡
んあっ♡

(頭がクラクラする…っ
どうして彼とだと
こんなにも興奮を…っ♡)



「いいですよ
ラ○ク様の中……
とても気持ち良いですっ

「わ、私も……
です……っ♡

わっ♡

んっ♡

ですが、まだです……
もっとう突いて下さいっ♡

畏まりました……っ



乱暴に……っ♡

私を強く…

求めて下さいっ♡



（その思いが身体を伝って

私の感情を…快感を

昂らせてくれるのですっ♡)

「おお：凄いうねりだっ
そんなにも
私のチ○ポが
恋しかったのですねっ」

「おお
んやあ」

「は、はいっ♡
その通りです…
あなたのチ○ポと
熱いオマ○コが
したかったのです…っ♡」



「ラ○ク様：その想い
是非とも私の目を見て
もう一度お聞かせ下さいっ」

「あなたのチ○ポが
恋しかった…っ
ずっとあなたとオマ○コ
したかったのですっ♡」



「ラ、ラ○ス様…っ

「もう『ごっこ遊び』は
お終いにして…っ

おん

おん

それではまたラ○クと…
恋人のように呼び捨てに
お呼びしろと…?」
そ…そうです…っ♡」



「ご命令ですか？」

「はい、命令ですっ

直ちに恋人らしく

振舞いなさいっ♡

おれ

おれ

ならば、

仕方ありませんね

……ラ〇ス♡」

……っ♡」



「んっ…あっ…
んっ…んぐっ♡」



「おや？
どうやら先に
イってしまいましたね

お望みの主砲は
これからですよ？」

「へ：平気です：
まだ：やれます：っ♡」



「では、いよいよ

最終段階といきましょうか

「また…

アレを

着るのですね…?」

あゝ

ビィン

ビィン

あゝ

ラ〇クを墮とす
一撃の為…お願いします」

そういう訳でしたら…
やむを得ませんわね…♡」

ビィン

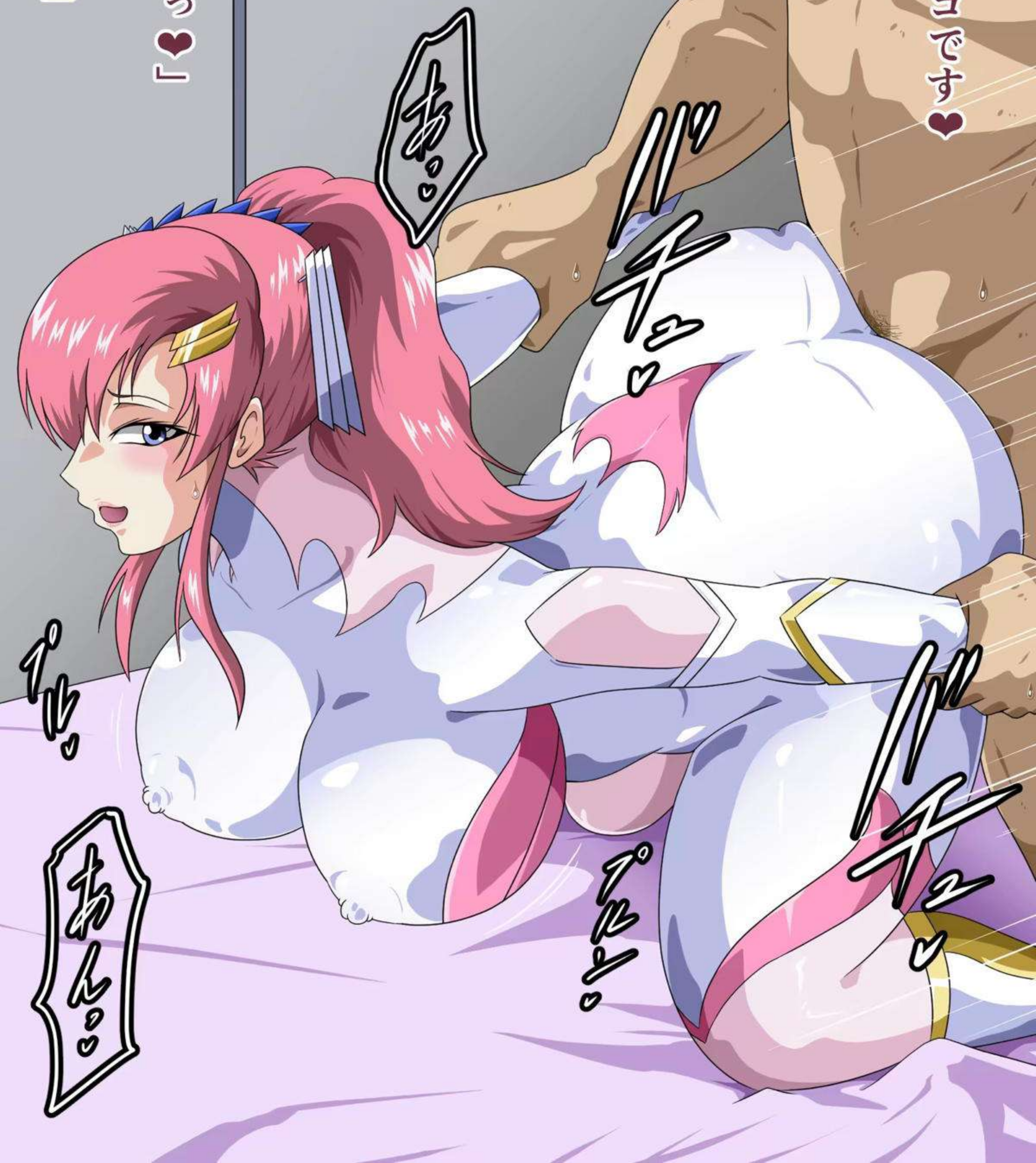
3! :
トキ



「さあ、ご希望の
パイスーオマ○コです♡

「やはり
これが一番だっ
堪らん…
堪らんですよ！」

では、存分に
犯して下さい…っ♡
言われるまでも
ありません…!!」

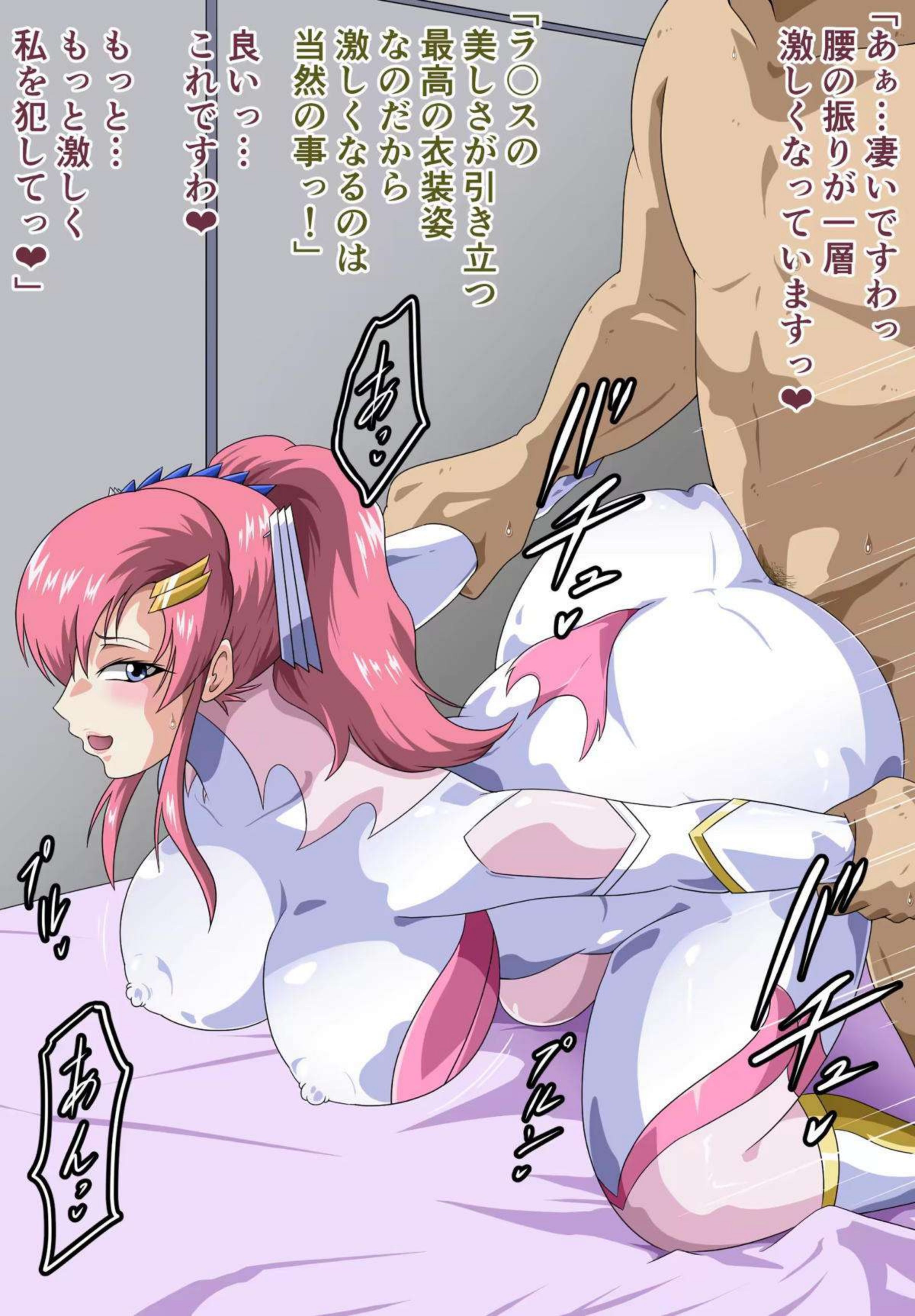


「ああ：凄いですわっ
腰の振りが一層
激しくなっていますっ♡

「ラ○スの
美しさが引き立つ
最高の衣装姿
なのだから
激しくなるのは
当然の事っ！」

良いっ：
これですわ♡

もっと：
もっと激しく
私を犯してっ♡



「では、更に
ペースアップだ！」

「んっ…んおっ♡

下品な声
出ちゃう…っ♡」

（キ〇と比べたら
倍の早さ…

体感だと3倍程にも
感じる本気の腰つき♡

性に関しての
ポテンシャルなら
彼の方が遥に格上…)



「ふふ、スピードだけでは
ありませんよ!」

「おおっ♡
そ、そこお♡」

（年齢相応の
経験を重ねた
確かな実力…

これが
彼の性技…

私の身体は
もう理解している…

キ○では
相手にならないと…)



この快感は
彼でなければ……

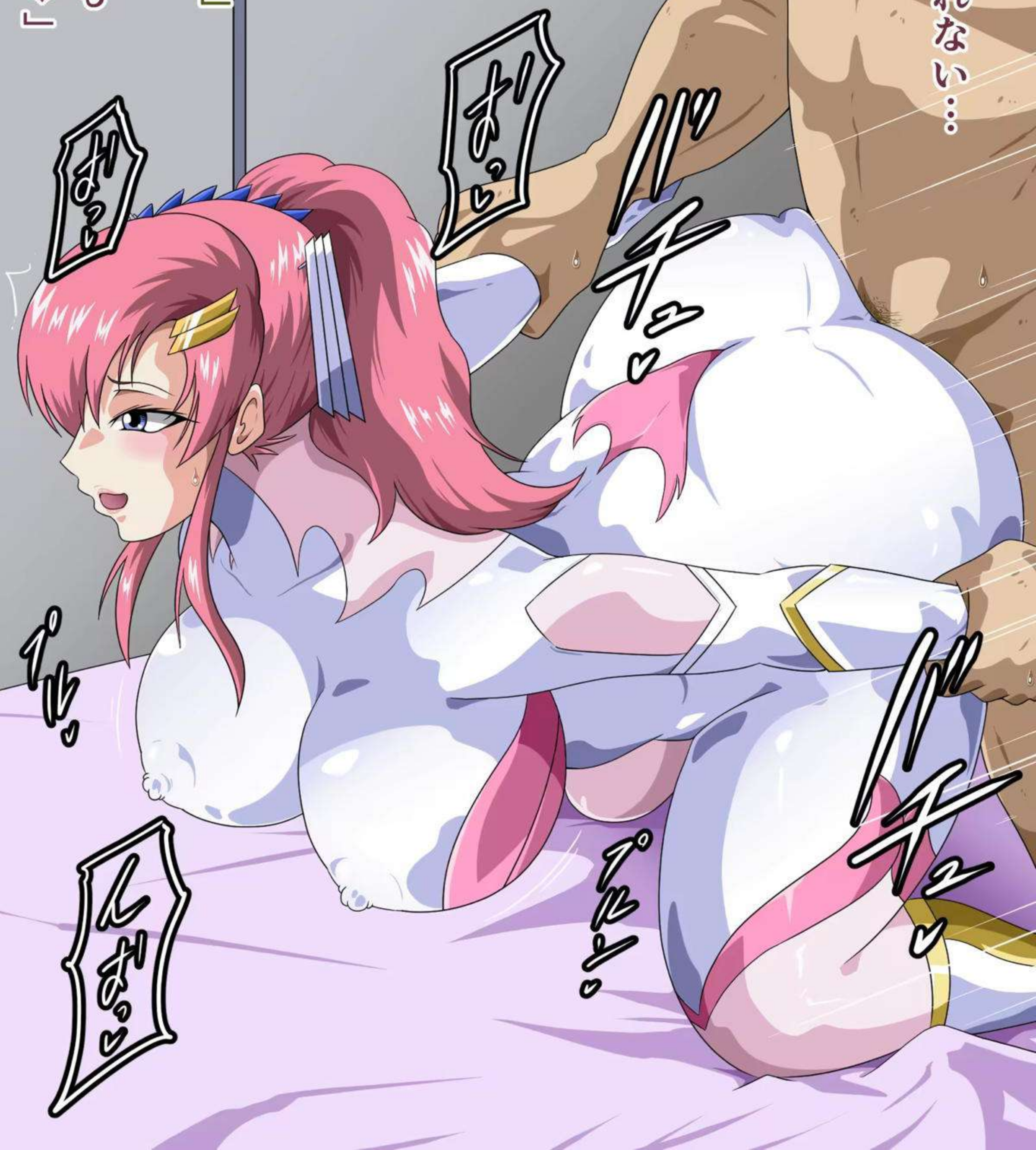
既に私は
彼の虜であり…
この快感から
離れる事は
出来ない…
♡)

さて、主砲発射は
間もなく…

「ラ○ス、いいね？」

「は、はいっ♡」

こちらはいつでも構いません……っ♡」



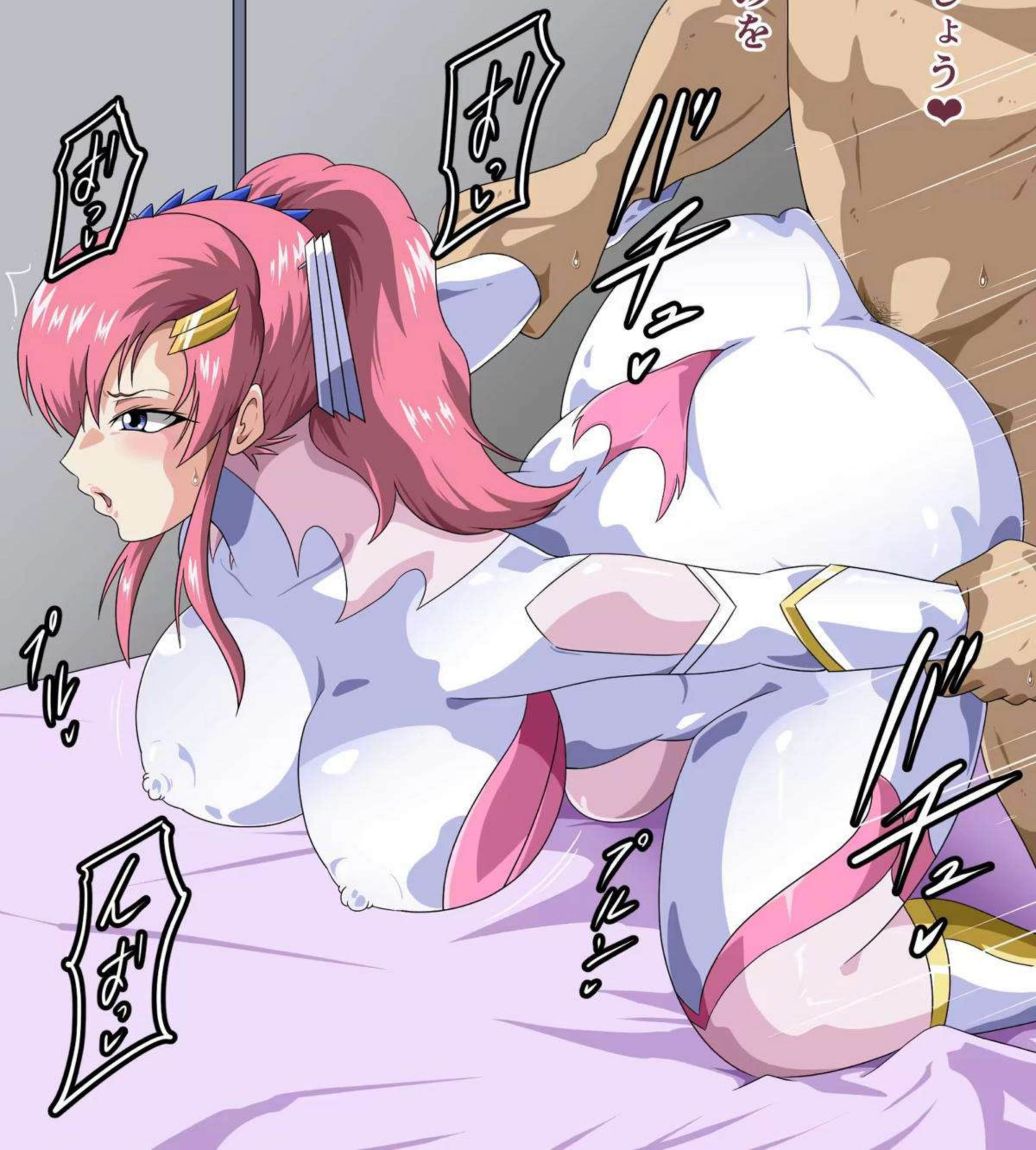
（なんと心地良い
ピストンなのでしょ♡

突かれる度に
私の心と身体が
満たされていくのを
感じる…っ♡

「こゝこの上

中出し射精など
されたら…っ♡

わ、私は…っ♡」



「あっ♡
あああっ♡」

ド♡

ド♡

（快感の伝わり方がより敏感に……っ♡
もう間もなくだというのに……
また先にイってしまう……っ♡）

ああっ♡

んはあ♡



「ひっ…んぐう♡
んっ…んむっ♡」

ドッ♡

ドッ♡

（いけませんっ
あと少し…
ほんの少しだけ耐えるのです…っ♡）

ああっ♡

んはあ♡



「ラ○ス……っ
も、もう……出るっ！」

ド
ン

ド
ン

「わ、私も……っ
お、お、んお……っ
♡」

あ
あ
あ

ん
は
あ
♡



「ラ○ス・クライン

あん

ド

オマ○コハキマッス♡」



「おおおっ…出るう！
まだまだ…っ！」

んあぁっ♡

おあぁっ♡

あっ♡

ビュッ

ドッ

ビュッ

ドッ
ビュッ

「私も…♡

イ、イクっ♡

いき続けますっ♡」



まだ出てる…っ♡

んああ、♡

本音

あ

4

子宮：
パンパンになるっ♡」



「はあはあ…っ
禁欲と飲んでいた精力剤の効果か…
まるで小便かと思う程の射精量だった…」

はあ
どろ

はあ

「う、嘘…
こ、こんな…減茶苦茶…っ♡」

はあ♡



（私はナチュラルの
おじさんち○ポにより…

はぁ
どん

はぁ♡

完全に…
オマ○コ撃沈されました…♡）

♡♡♡

♡♡♡

♡♡♡

（圧倒的火力の前に為す術なく
遂に…堕とされたのです…♡

ドク

はぁ

はぁ♡

♡♡♡♡♡

ああ…キ…
本当に…ごめんなさい…



「これだけ出しておいでなんですが…
もう一度…宜しいか？」

はっ♡♡

はっ♡♡

「は、はい…
断る理由などありません…♡」

♡♡♡

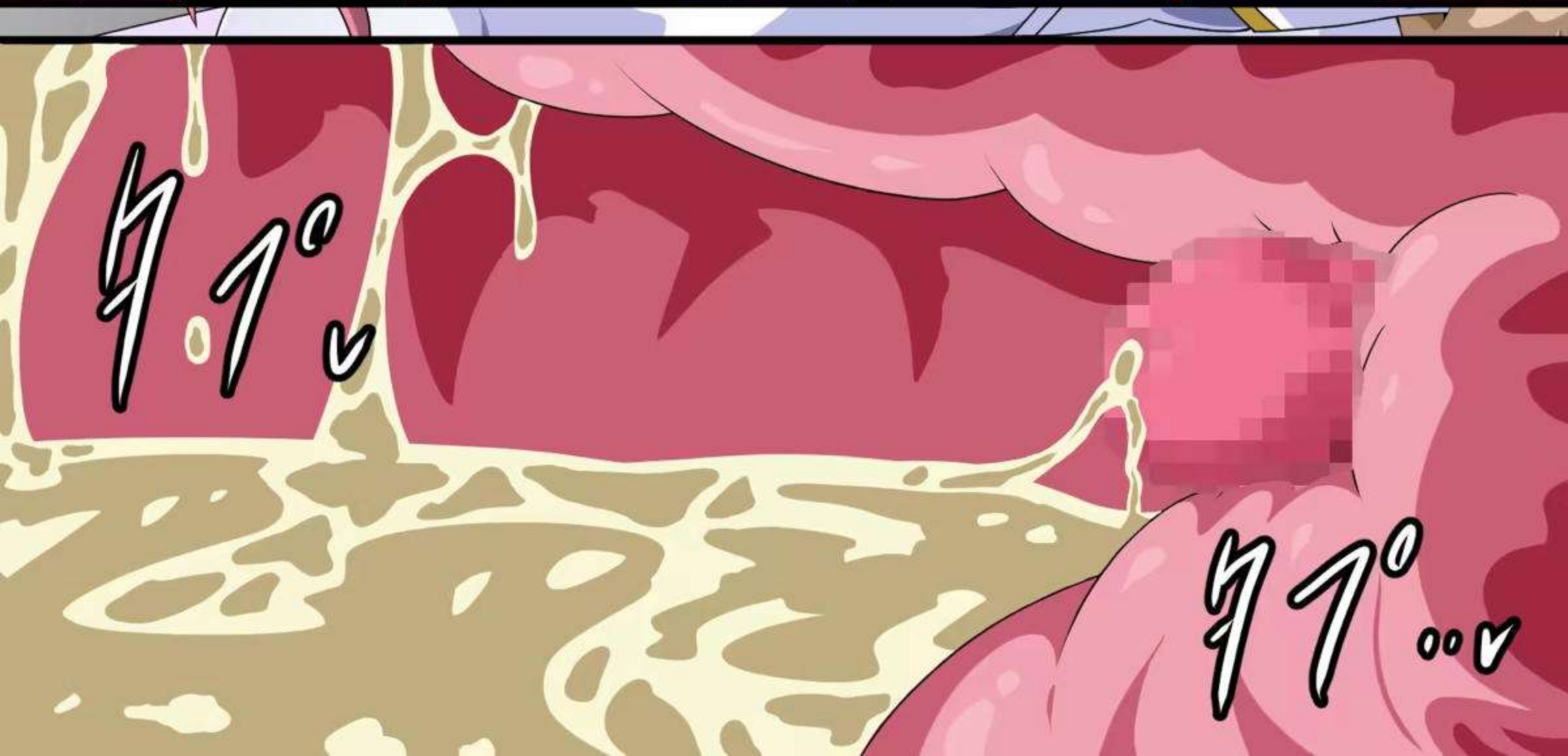
♡♡♡

「真の世界平和までの道のりは
まだまだずつと掛かるはずです…」

はっっっ

ですが、私はなんとしても
その未来を目指したいと思っています…」

はっっっ



「ですので…今後も…
幾久しく宜しくお願いします…♡」

はっ♡♡

（愛しています…）

私は…『あなた』を…
心から愛しています…♡）

はっ♡♡

